四季雑感

「本学会のこと，じぶんのこと」

About JSES and about myself

桶　真一郎 *

本稿「四季雑感」を執筆するにあたり，この文章が誰に届くのかを考えた．日本太陽エネルギー学会の会員数は約600名(2022年11月現在)．ちなみに，筆者の勤務校には本学会の会員は私以外には学生を除き1名しかいないはずだ．それだけの人数にしか配られない本誌「太陽エネルギー」に何を書いたところで，それが広く社会に届くことはない．これは，まことに残念なことだ．本誌270号の特集「FIT制度開始からの10年を振り返り，今後を展望する」は，さまざまな分野の専門家による中身の濃い論説がそろう非常に充実した内容だった．これが，たかだか600名の会員にしか届かないのは実にもったいない．なんとかなりませんか？

本誌が多くの人に読まれないということは，論文の投稿意欲にも影響する．編集委員会で課題になっているのは投稿数の減少である．得られた研究成果をより読者の多い他の学会や海外の学術誌に投稿したいと考えるのは当然だ．大学等に勤務している場合は業績評価に響く（昇任やボーナスに影響）から，という生々しい理由も考えられるが，本質的には，研究者にはできるだけ多くの人に自らの研究成果を知ってもらい，それをよりよい未来をつくるための礎にしてもらいたいとの気持ちがあるからだと思う．本誌が読者数で他の学術誌等に対抗するのは難しい．一方で，本学会の会員のみなさんがもつ知識・知見や技術は他の学会等に勝るとも劣らないと思っている．これだけの力をもつ学会やその会員のみなさんのプレゼンスを高めることこそが社会貢献であり，明るい未来をつくることにつながっているはずだ．

論文投稿数の減少に話を戻すと，いま編集委員会ではその増加策をさまざまな角度から真剣に検討している．どのような方針をとるにせよ，限られた会員数・読者数のなかで投稿数を増やすためには，なんらかのかたちで投稿のハードルを下げなければならない．そうすると，投稿数が増える半面，投稿される論文の平均的な質の低下が予想される．だが，これはけっして悪いことではない．長期的には，投稿数と掲載数が増えることで掲載される論文の質はおのずと向上するはずだからである．ただし，投稿数は増えずに質だけが下がり，結果として掲載される論文が低レベルなものばかりになるという最悪の想定も成り立つ．そうならないように，会員ひとりひとりが今まで以上に積極的に活動しなければならない（主に自分への言葉）．

すこし前に，私はなぜ太陽エネルギーを研究しているのかを考えた．研究はじめた経緯ではなく，いまもそれを続けている理由である．結論がでるまで少し時間がかかったが，やはり太陽エネルギー・太陽光発電が好きだからだとわかった．私は，太陽エネルギー・再生可能エネルギーを電力や熱に効率的に変換する方法は，人類が手に入れた究極の技術のひとつだと思っている．その研究を仕事として続けられることは純粋にうれしい．

ときどき学生に問いかけたり，自分でも考えたりすることがある．それは，「もしいま10億円が手に入ったら，やりたい仕事や取り組んでいる仕事をやめるかどうか」である．メジャーリーガーや大会社の経営者と比べるとスケールが小さいが，一介のサラリーマンとしては，10億円はとてつもない金額である．もし食べるためだけに働いているのならば，迷わずやめるだろう．しかし，私は仕事をやめない（と思う）．太陽光発電システムを搭載した自宅のローンを完済できるし，ほしいものはたいていなんでも手に入る金額を手にしても，今の仕事はやめない（ただし，やめさせられる可能性はある）．これは，太陽エネルギーの研究の成果を学生や社会に還元することが，金銭欲や自己顕示欲を満足させることに留まらず，それらとは全く違うものを求める活動に他ならないからだと思う．

* 津山工業高等専門学校　総合理工学科電気電子システム系　教授